



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「呐喊」から「彷徨」へ：民族的自己批評としての魯迅文学 その三
Author(s)	丸尾, 常喜
Citation	北海道大學文學部紀要, 31(2), 171-210
Issue Date	1983-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33471
Type	departmental bulletin paper
File Information	31-52_PR171-210.pdf



「呐喊」から「彷徨」へ

—— 民族的自己批評としての魯迅文学 その三 ——

丸 尾 常 喜

(一)

雑誌『新青年』は、九卷五号が一九二一年九月に出たあと十ヶ月ほど空白をつづけ、一九二二年七月ようやくその六号を刊行したが、その後ふたたび一年ちかい停刊状態にはいった。そして一九二三年六月あらたに季刊雑誌として登場したときは、純然たる中国共産党の理論誌であった。『新青年』九卷六号には胡適の詩が二首掲載されているが、それはこの雑誌の終刊のピリオドを示すものであり、すでにそれまでの十ヶ月の間に、『新青年』グループの分裂は決定的であつたのである。魯迅の「阿Q正伝」は、この間一九二一年十二月から翌二二年二月にわたって『晨报副刊』に連載されたが、それは中国史の新時代を画したこの陣営の急激な解体の渦中に身をおいた一人の作家がくりひろげた瞳目すべき冒険であつた。この作品の展開と達成についての私見はすでに述べたとおりであるが、主人公阿Qの受難をとおして、「精神勝利法」が、踏みにじられ侮辱されることのあまりに多かつたものたちの「かりそめの生」、「いつわりの

「呐喊」から「彷徨」へ

回復」であることを解き明かしつつ、阿Qたちの「生」の深い孤独と苦痛を、阿Qの発する「救けてくれ」の一語に凝縮したとき、魯迅もまた『新青年』的な世界からおのずと新しい場所へと踏みこんでいたのである。『呐喊』の世界はこの作品を境としていちじるしく相貌をかえ、『彷徨』へのとば口に立つ別の世界をわれわれに示している。

「寂寞の時代」——一九二二年の魯迅文学の世界を一言でおおうとすれば、このような表現がもつともふさわしいであらう。

すでに述べたように、日本留学期に書かれた「摩羅詩力説」、「破惡声論」の諸篇は、激しい熱情の発露を見せながら、すでにその根底に「寂寞」という語で表現された基調音をたたえていた（『摩羅詩力説』では「蕭条」の語が用いられているが、ほぼ同様の意味である）。それは古い文明を誇った中華民族の歴史的な衰退と閉塞の状態を表現するとともに、その流れに身をおく青年の悲涼に満ちた危機の意識であった。青年魯迅が、この「寂寞」をうち破る「心声」の起こるのを期待して「新しい声を異邦に求め」たのが「摩羅詩力説」であり、「寂寞」を深めこそすれ、決して救国の声とならない「惡声」に力をこめて挑んだのが「破惡声論」であったのである。

周知のように、魯迅は『呐喊』自序（一九二二年十二月）において、この「寂寞」のはじまりを許寿裳、周作人らとの合作による雑誌『新生』の計画の失敗に認めて、次のように書いている。

「私がそれまで経験したことのない味気なさを感じるようになったのは、これ以後のことであった。私ははじめそのわけがわからなかった。その後思うに、すべて人間の主張というものは、賛成を得ればその前進を促され、反対を得れば奮闘を促されるものである。ところが見知らぬ人々のなかで叫びながら、何の反応もなく、賛成もされず反対もされない場合、まるでではてしない荒野に立っているように、手を下すすべもない。それはどれほど悲しいことか。

私はそこで私の感じたものを寂寞と呼んだ」

伝記的事実に即していえば、このような「寂寞」は実際には、かれら兄弟がわかわかしい気負いと気骨の折れる準備をもって世に問うた『域外小説集』一、二輯が、東京・上海を合わせて各四十冊ほどしか売れないという慘澹たる結果に終わったとき、はじめて明瞭に意識されるようになったものである。そして同種の「寂寞」はその後くりかえし魯迅を襲ったために、「自序」は「狂人日記」執筆の内的契機をこの「寂寞」によって説くことになったのである。

「私自身は、自分がもはや内につきあがるおさえがたいものがあつて発言する人間ではなくなつたと考えていた。それなのにいまでもまだ昔の自分の寂寞が忘れられないためかも知れない。あの寂寞のなかを走っていく猛士たちをすこしでも慰め、思いきり先駆けてもらうために、時々呐喊の叫びをあげてしまうのである」

たしかに、「大きな毒蛇のように」魯迅の魂にまといついて離れない「寂寞」の苦しみに耐えられず、自分の魂を麻醉せようと「国民」のなかに沈み、「古代」に潜もうとする自己を語り、「寂寞」の共有によって出発を説く「自序」の文章は、そのとぎすまされた文体とともに、時間を超えて私たちの心を深く打つものがある。しかし、すくなくとも魯迅を「狂人日記」をはじめとする「五四」期の作品の執筆にかりたてた動機に関するかぎり、「自序」の説明は当時の真実に合わないとするのが、小論の立論の立場であつた。つまり私は、たとえば小説「葉」の展開に自己の「寂寞」の埋葬を見、「人類は決して寂寞ではないだろう。生命は進歩するものであり、楽天的なものだから」（『随感録六十六』生命の路、一九一九年）という語に、中国の「寂寞」を破り、中国民族を「人類」のゆるぎない一員として再生せしめようとする決意を認めてきた。『新青年』を中心とする一団の熱気のなかで、「真の人間」に対する「羞恥」（『恥辱』）の意識と「進化論」への信仰こそが、「五四」期の魯迅をつきうごかす契機であつたのである。³

「呐喊」から「彷徨」へ

ところが、「故郷」(一九二二年一月)のころを境に、魯迅はたとえば次のようなことばで「人類」の進化への信念を語ることはなくなった。

「自然が人間に賦与した不調和はまだ多い。人間が萎縮し、墮落し、退歩することもまだ多い。しかし生命は決してそのためにふりかえりはしない。どのような暗黒が思潮をせきとめようと、どのような悲惨が社会を襲おうと、どのような罪惡が人道をけがそうと、人類の完全を求める潜在的な力は、いつも地面にまかれたこれらの鉄の棘を踏みつけて前進していく」(『隨感錄六十六、生命の路』)

このように負から正へ、否定から肯定へとたえずよみがえる人間と「人類」の認識は、「五四」期の魯迅がくりかえし語ったものであった。それが語られなくなったことは、魯迅における新しい季節の到来を告げているのである。一九二〇年十一月に書かれた青木正児あての手紙が簡潔にこの間の事情を表現している(原文は日本語)。

「わたくしの書いた小説は幼稚極なものです、只だ本国に冬の様で歌も花もない事を悲んで寂寞を破るつもりで書いたものです、……これから書くは又書くつもりですが前途は暗澹です、こんな環境ですからもっと諷刺と咀咒に陥るかも知れません」

この手紙は、「狂人日記」以下の作品が「寂寞」を破るために書かれたこと、「五四」の退潮のなかで魯迅が自分の作品世界の変化を予期していることを教えている。魯迅のいう「暗澹たる前途」をまえにしてかれがこころみた「諷刺」小説「阿Q正伝」の展開と達成についての私の理解はすでに述べたとおりであるが、この「諷刺と咀咒」の語は、『呐喊』後半の諸作品と同時期の他の文章とを理解するうえで一つの有力な示唆を与えている。

「阿Q正伝」以後の一九二二年に書かれた魯迅の作品を列記すると、それは次のようになる(『呐喊』所収以外の散文は二

段おとして記す。

「『エロシエンコ童話集』序」 一月作 『エロシエンコ童話集』（一九二二年七月刊）

「『学衡』をはかる」 二月作 『晨报副刊』同年二月九日

「『ロシア歌劇団』のために」 四月作 『晨报副刊』同年四月九日

「無題」 四月作 『晨报副刊』同年四月十二日

「端午の節季」 六月作 『小説月報』十三卷九号（同年九月）

「白光」 六月作 『東方雜誌』十九卷十三号（同年七月）

「『以テ其ノ艱深ヲ震ス』」 九月作 『晨报副刊』同年九月二十日

「所謂『国学』」 十月作 『晨报副刊』同年十月四日

「童謡の『反動』」 十月作 『晨报副刊』同年十月九日

「兎と猫」 十月作 『晨报副刊』双十特号（同年十月十日）

「アヒルの喜劇」 十月作 『婦女雜誌』八卷十二号（同年十二月）

「村芝居」 十月作 『小説月報』十三卷十二号（同年十二月）

「『一是之学説』」 十一月作 『晨报副刊』同年十一月三日

「理解できぬ音訳」 十一月作 『晨报副刊』同年十一月四、六日

「批評家に対する希望」 十一月作 『晨报副刊』同年十一月九日

「『涙ながら』の批評家に反対する」 十一月作 『晨报副刊』同年十一月十七日

「呐喊」から「彷徨」へ

「小に即いて大を見る」 十一月作 『晨报副刊』同年十一月十八日

「不周山」(補天) 十一月作 『晨报四周年紀念増刊』(同年十二月一日)

「呐喊」自序 十二月作 『晨报・文学旬刊』一九二三年八月二十一日

上記のようにこの年の四月、魯迅は「『ロシア歌劇団』のために」を『晨报副刊』に寄せた。そのなかに、

「北京へはじめてやってきたある人が、まもなく、まるで砂漠に住んでいるようだ、と言った」

という一句がある。この句にいうある人、つまりエロシエンコが、日本に有害な不穩外人として国外追放を受け、ウラジオストック、上海を経由して北京八道灣の周家に同居するようになったのはこの年の二月二十四日であったが、やがて「さびしい、さびしい、まるで砂漠にいるようにさびしい！」(寂寞呀、寂寞呀、在砂漠上似的寂寞呀！)とうったえるようになったのであった(魯迅「あひるの喜劇」、同年十月)。

魯迅によるエロシエンコ作品の翻訳は、一九二一年九月の「沼のほとり」にはじまる。魯迅のこの詩人への関心は同年六月のかれの日本追放に発したものであったが、これ以後二二年の一月まで計九篇を訳し、胡愈之らの訳した三篇と合わせて『エロシエンコ童話集』(刊行は七月)を編みその序文を書きあげたのは、エロシエンコ本人を北京の自宅に迎えるほぼ一ヶ月まえのことであった。その後も一九二三年までに、魯迅は「桃色の雲」をはじめ六篇の作品を翻訳している。「せまい檻」(一九二二年訳)の訳者後記で、魯迅は「巻をおおって、私は人類のなかにこのように嬰兒の心を失わずにいる人と著作の存在することを深く感謝した」と述べているが、この時期この盲目の詩人の天真と人類から小動物、花木の類にまでひろがる愛や激しい自由への渴望が、魯迅にとっていかに身ぢかなものであったかが知られる。私という「寂寞の時代」にこの二人の文学者が北京の空の下の一隅に同居した事実は、単なる同情や援助を超えた一つの

運命的な出会いであったといわねばならない。

エロシエンコの「寂寞」がどのようなものであったか、参考のために北京時代の作品である「時のおじいさん」を試みることにしよう。

「大きい、賑やかな北京があるにちがいない。けれども、私の北京は、小さい静かな北京だ。

.....

こんな静かなところに住んで、こんな静かなひとびとにまじわっていると、私の心もすこしは静かになりそうなのだが、やはりどうしても静かにならない。そして、なれそうもない。

夜になると、私はことにさびしい。夜はいつもひとりであるから、床にはいつ、なにか夢でも見て、はやく眠ろうと努力するが、私の北京はよく眠っているのに、私は眠ることができない。

私の北京は、美しい夢を見るところではなく、むかしいつか見たことのある夢さえ忘れさせるところだ。いつか、モスクワや東京の友だちといっしょに、芝居や音楽会や社会主義者の会などにでて、夜じゅうわいわいさわいだことを想いだすと、私は嘆息する。ひとつ床に友だちが三、四人もめぐりこんで……社会や国家や全人類を金持や野心家やあらゆる罪人から救いだす計画をたてたり、あるいは私たちの手で自由の樂園のような世界をつくった夢を見たりした。そんなことを想いだすと、私はさびしくなって泣きだす⁵」

カチカチと「時のおじいさん」が「私」に語りかけるのは、古い神々がたおれてようやく自由を得たと思ったのもつかの間、若者たちが自由に酔いしれているうちに古い寺が復活し、若者がふたたび古い神々への犠牲となろうとする物語である。一篇は「私」が「ああ！ この不幸な生命をささげて、人類を幸福にすることができたら、ほんとにいいん

「呐喊」から「彷徨」へ

だが……」と思いながら、一方で「ああ！ 僕の心も、北京の十一月の夜のようにつめたく、そして十一月の夜の北京のように静かになってくれればいいんだが……」と叫ぶところで結ばれている。人類の進化への懷疑と人類への愛とにひき裂かれ、静寂のなかに眠ろうとして眠ることのできない精神の悲哀が、盲目の詩人エロシエンコの「寂寞」であったのである。

鲁迅の『ロシア歌劇団』のために」は、「まるで砂漠に住んでいるようだ」というエロシエンコの言を肯定して次のようにつづけている。

「そうだ、砂漠がここにある。

花も、詩も、光も、熱もない。芸術もない。そのうえ趣味も、好奇心さえないのだ。

重い砂……

私はなんと軟弱な人間なのだろう。このとき私は思ったのだ。

もし私が歌い手であつたら、私の声は消えいつてしまふだろう、と。

砂漠がここにある。

しかし、かれらは踊り、歌った。美しく、誠実に、そして勇猛に」

「ロシア歌劇団」は十月革命後祖国を離れて流亡する白系ロシア人たちの歌劇団で、鲁迅が観劇したのは四月四日北京公演二日目の日であった。「第一舞台」の座席の中央部に三十数人が腰かけ、それを囲むように兵士たちの大群が席を占めていた。舞台の男女が抱きあうたびに、兵士たちは猛然と拍手をくりかえした。当時の新聞によると、観客のマナーの劣悪さは、劇場側が開演まえに観客に対し指示される場面以外の拍手はしないよう注意を出すほどであったとい

う。⁶この一文は、軍閥支配の尖兵として北京市中を跋扈し市民にしばしば危害を与えていた兵士たちが座席の大半を占め、乱暴で卑猥な拍手や喚声をくりかえす劇場で、ひたすら誠実に美しくかつ勇猛に歌い踊りつづける流浪の芸術家たちのための「広告」として書かれた。激しく哀切な抒情をたたえているこの文章に、われわれはエロシエンコ、魯迅、踊り手たち三者の共有する深い「寂寞」を見ることが出来る。この一文はそのような「寂寞」に苦しむ作者の、この「砂漠よりもっと恐しい人の世」に対する「反抗」と「呪咀」の歌であったのである。

「無題」と題する短い文章が書かれたのは、『ロシア歌劇団』のために」の三日後であった。この一文は、魯迅の文学の動態を、作品に現われる恥辱感や羞恥の意識を手がかりにして明らかにしようとする小論において微妙で重要な位置を占めているので、以下やや詳細に分析を加えることにしたい。

「私」がある日ある私立学校の遊芸会に数人の友人と出かけたおり、「昆曲」の劇場入口にいらっていると、一人の男に息もつけぬほど乱暴に身体を押しつけられる。当時作者は社会生活のさまざまな場面でこのプロローグに語られるような、人を人とも思わぬ無神経な人間の行為に悩まされていたのである。『ロシア歌劇団』のために」の兵士たちもそのような一例であったが、一九二一年に書かれた「事實は雄弁にまざる」では、前年に買った鞋が破れたために同じ店に同型の鞋を買いに行った「私」に対して、まったく異なった別種の鞋を取り出して来て同じだと強弁する店員のことを書き、「事實は雄弁にまざる」という西哲の言の中国に通用しないことへの憤りを吐露していた。

このあとみやげを買うために立ち寄った菓子屋で「黄枚朱古律三文治」^{カウチン・ユ・リウ・サウ・ウェン・チ}（このいささか神秘めいた名は、実はチョコレート・アプリコット・サンドイッチのことであったが）八はこを買うことにして、金を払い、それをポケットに入れようとしたが、そのときふと「私」は他のはこの盗まれるのを警戒し、指をひろげておおっている店員の手をみてしまった。

「呐喊」から「彷徨」へ

「私」は店員の行為に侮辱を感じる。しかし、盗まれることはないと保証できぬ以上、それを侮辱とみなすことはできない（それが北京の現実であった）。まして自分でも自分が決して盗みなどはたらかはししないと保証できないくらいなのであるから。だが、そのとき「私」は不愉快をおさえることができなかった。「私」はつくり笑いをしながら店員の肩をたたいて言った。「そんなことをしなくともいいよ。よけいに取ったりしないから……」。すると店員は「とんでもない、とんでもない」と言いつつあわてて手をひっこめた。そうして赤くなって恥じいたのである。これは「私」にとつてたいへん意外なことであった。「私」はかれが（あの靴店の店員のように）強弁するとばかり思っていたのだから。そこで「私」もまた恥じいたのである。

「この種の恥ずかしさ（慚愧）」は、しばしば私の人類を疑う頭上にかけられた一滴の冷水となる。これは私にとって損害である。

夜一人で部屋に腰かけていると、人々から少くとも一丈余は離れている。分けたのこりの『黄枚朱古律三文治』を食べながら、トルストイの数ページを読んでいると、しだいにまた自分のまわりがはるかに人類の希望につつまれているような気持になってくるのである」

このような「羞恥」によって「私」の人間不信が矯められる一篇の展開は、同様に人間不信のなかにある「私」が、人力車の棍棒に触れて倒れた老婆を扶けおこして交番に歩いて行く車夫のうしろ姿を車上から見つ、自分の「卑小さ」を知らされ、「羞恥」とともに「勇氣」と「希望」とを与えられるあの「小さなできごと」とひどく似ている。「小さなできごと」の「私」はこのできごとを思い出すたびに、「苦痛」に耐え努力して自己を省みた。「無題」の「私」にとつても「羞恥」は自己の「損害」と感じられている。両者ともに、むしろ人間不信に埋没するほうが、なのであ

る。二篇の類似はこのような点にまでおよんでいる。しかし、このことは一九一九年（作品で回顧されている事実是一九一六年とされている）から、一九二二年まで三年を経過して、魯迅の内的、外的状況にまったく変化のなかったことを示してはいない。それはむしろ一巡して状況がふりだしにもどったことを意味する。しかも両者をつぶさに読みくらべるならば、単純な回帰とみなすことのできない微妙で重要な相違を見いだすことができるのである。

「小さなできごと」の人間不信が「人を軽蔑する」（「看不起人」）ことであつたのに対し、「無題」のそれは「人類を疑う」（「懷疑人類」）と表現されている。このことは魯迅において、「真の人間」、「人類」、「進化」という模範・兆候によってよく規定されていた一つの時代が終つて、かれが新しい場所に立たされていることを示している。新しい状況の出現が、自民族への懷疑と絶望（これは「辛亥革命」のその後の帰趨がかれの心にかびのようにはびこらせたものであつた）を人類そのもののへの懷疑へとひろげさせ、かれの文学活動をささえてきた「羞恥」の意識——あの「狂人日記」の展開や『或る青年の夢』訳者序」がもっともよく示していた——さえその足場を失うという重大な危機がかれをおとずれていたのである。「無題」の「私」を襲つた「羞恥」はそのような「人類への懷疑」へあびせられた一滴の冷水であつたのであるが、二つの文章は「私」の「羞恥」をひきおこした人物の姿においても重要な相違をもっている。「無題」の「私」の「羞恥」が店員の見せた「羞恥」によってひきおこされるという構造は、二人がともに北京の現実に深く傷つけられていることを示している。「私」の「羞恥」は、店員もまた北京の現実に深く傷ついていることを想像だにしながら自分の状態の発見に発している。一方二人の「羞恥」の共有は、同時に「寂寞」の共有を意味しているのである。そこには「羞恥」が「私の心を新しくし」、「勇氣」と「希望」を増して行動へとみちびくあのダイナミズムを見ることはできない。「私」が「人類の希望」を見るためには、トルストイを読むだけでなく、北京のあらゆる現実と少くとも

「呐喊」から「彷徨」へ

一丈余の距離をたもつことが必要であつた。北京の夜の隔離された独り居のなかで、「私」はようやくまた、（数年まえのように）「人類の希望」にはるかにつつまれるのを感じるのである。この静謐な光景に「私」の深い「寂寞」をみとめることができる。

たしかに魯迅の文学は「寂寞」と背中あわせに生みだされてきた。しかし「寂寞」のなかから「寂寞」を破るために発した声をいま「空しく紙上に留めた声」（『呐喊』に題す）、一九三三年）と思うこともある新しい状況を迎えて、魯迅は「寂寞」そのものが声となる新しい時代に踏みこんだのである。

(二)

「寂寞」そのものが声となる場合に、散文が「随感録」風の啓蒙的、批判的性格から離れて、抒情詩や身辺瑣記に移行していくことを『ロシア歌劇団』のために」と「無題」とは示している。『呐喊』後半に位置する「兎と猫」、「アヒルの喜劇」、「村芝居」などの小説が、堅固な虚構性を離れて、わが国の「私小説」にちかい作風を見せているのも、同じ理由にもとづくものであらう。ただ魯迅その人にとって事柄はさほど単純ではないのであって、「阿Q正伝」と「兎と猫」との間にある二篇の小説「端午の節季」、「白光」（ともに一九二二年六月の作）の世界は、きわめて重要な位置にありながら、その位置づけはそれほど容易ではない。私はいまこの二作品を、この「寂寞の時代」のまだ中途半端な作者の姿勢が生んだ「諷刺」小説として考えてみたいと思う。この二篇にも、すでに「無題」に見たような一種の回帰現象をみとめうることに着目して、その「諷刺」の特徴を吟味し、作品の位置づけを試みることにしたい。

一九二〇年十月『時事新報』副刊『学灯』の「国慶」專輯号に寄稿した「髪の話」は、魯迅が忘れられた双十節を逆説的に記念した作品であった。『一篇は双十節の日に訪ねてきた先輩Nが「私」を相手に話すことばで構成されているが、そこにはたしかに、多くの犠牲によって贖われた革命とその挫折とに寄せる魯迅の「居ても立ってもいられない」思いが託されている。しかし、N自身のことは自虐的に革命の唯一の成果であり恩恵であったかのごとき辯髪からの解放を語りつつ、かつての辯髪を切った青年たちの払った犠牲を、今日同様に断髪を敢行する女学生たちの演ずる「悲劇」にかさねて一種の循環論をくりひろげ、改革を目ざす運動に対する懷疑を表明するにいたるのである。「造物主の皮の鞭が中国の背中にとどかぬかぎり、中国はいつまでもいまのままの中国で、自分では毛筋一本改めはしないだろう」というNの感慨は、このときもおそらくいくとも魯迅のなかに浮かびあがったものであったろう。それにもかかわらず、一篇を支配しているのは挫折感を吐露しつつけるNに対して「聴きたくない」表情を示し、かれを送る門口に黙々と立つ「私」の訣別の意志にあったのである。

「端午の節季」では、当時実際にあった教員や官吏の給料欠配、遅配の問題を背景に、官吏であり教員を兼ねる主人公方玄綽の「似たりよったり説」（『差不多説』）の形成となりゆきが述べられる。いままで大人が青年を圧迫し、兵隊が車夫を殴るのを見れば腹を立てたが、いまでは青年が大人になり、車夫が兵隊になったらやはり同じことをするだろうと思ひなおしてみると腹も立たなくなる、このような考えがやがて「地を易うれば則ち皆然り」（『孟子』「離婁」）とする「似たりよったり説」に練りあげられ、しかもこの説を証明するような事件が、給料遅配問題をめぐって次々とかれの身辺に起こり、ついに節季まえの米屋の支払いさえできなくなるのであるが、窮した方玄綽の脳裏に浮かんだ策が日頃バカにしている無学な妻の提案と同じであった、というのが全体の展開である。

「呐喊」から「彷徨」へ

この作品には、魯迅をめぐるいくつかの重要なテーマが、未消化のままに盛りこまれているように思われる。「似たりよったり説」はそれが循環論であることよって「髪の話」のNの語と共通している。魯迅はふたたびここで一つの挫折論に向きあわねばならなかったのである。しかもNの循環論が圧迫される青年の側に立って外的状況のvarietyについて述べているのに対して、方玄綽は圧迫を受けている青年も結局は圧迫する大人になるという人間の内的状況の循環を指摘する。そこに「新しい感慨」と呼ばれる「新しさ」がある。このことはすでに魯迅の視野に「進化論」の崩壊というテーマがはいっていることを示している。それでいて問題は追究されることなく未熟なまま放置されているのである。またこの「似たりよったり説」は、それが「新しい気なぐさめ」、「分に安んじた空論」と称されるように「精神勝利法」の一種でもある。それは「進化論」を保持しつづけることによってもたらされる苦痛や羞恥からの逃避であつたし、自分の無力さや非行動に対する自己弁護であつた。他の文章で「自由はむろん金で買えるものではありませんが、金のために売り払うことはできません。人類には一大欠点があつて、それはしよっちゅうひもじくなるということです」(「ノラは家出してどうなったか」、一九二三年)と述べるように、魯迅はここでたしかに知識人の生活問題にぶつかっている。これは『彷徨』中の「酒樓にて」(一九二四年)、「傷逝」、「孤独者」(一九二五年)などのテーマにつながるものであり、このことの持つ意味は小さくはない。しかし、「精神勝利法」をたよりに永遠に勝利者の位置を保持するはずであつた阿Qが、しだいた追いつめられ、「生活問題」から「革命」へ、「革命」から「死」へとすすむほかなかった「阿Q正伝」と比してみるに、二つの「諷刺」小説の世界は、そのスケールも骨格もまったく異なったものとなつたのであつた。方玄綽の「生への意志」は追いつめられながらも、空中に浮遊してなかなか焦点をむすびきれないのである。「髪の話」と比較しても、作者自身の思想の何ほどの投影である主人公とその主人公に対する作者の批判との間の緊

張がゆるみ、混雑することによって、それなりの技巧の成長をうかがわせつつも作者の位置の定めがたい作品となったといわねばならない。「端午の節季」は、「阿Q正伝」の残影と『彷徨』の未熟な前ぶれとの間にひき裂かれた一階梯を示しているのである。

一方「白光」に見いだすのは、「孔乙己」への回帰である。孔乙己、陳士成ともにいくども落第をくりかえしている老童生であった。そして、魯迅の筆づかいはここでも明瞭に異なっている。いざりながら去っていく孔乙己のうしろ姿は、生きがたい世を生きた敗残の読書人の「生」が放つ悲哀の光につつまれていた。そのうしろ姿を見送ることも眼は、孔乙己の悲哀を見つめる澄んだ光をたたえている。一篇は旧社会の終末を宣告する鎮魂がそのまま白みゆく東方に向かつて立つ出発の姿勢となる、そのような清澄な抒情性につらぬかれているのである。ところが陳士成は「功名利禄」の觀念に骨の髄まで冒されている人物である。かれを十六回も科場に運んだのは、合格すれば多数の紳士たちが交際を求めてつめかけ、荒れた屋敷のあちこちを借りて住む有象無象を追い出し、建物を一新し、官となって莫大な財をなすという夢であった。それゆえ十六回目の落第が明らかとなり絶望したとき、屋敷の一角に先祖のこした銀が埋められている、幸福な子孫がそれを掘りあてる、その場所は「左へ曲り右へ曲り、まえに歩きうしろに歩けば金銀ザクザク」という謎のことばに秘められている、という祖母から聞いた言い伝えにすがりつき、ついに発狂して死ぬのである。

二つの世界の相異は、特に両者の手指の爪の描写のなかに象徴的に読みとることができる。最後に酒店に現われたとき四文の錢を「私」にわたした孔乙己の泥だらけの手。酒を飲み終るとかれはその同じ手でいざりながら去っていったのであるが、それはかつて「私」に「回」という字体が四つもあることを教えようとして酒に浸したことのある爪であり、こどもたちに豆を分け与えたあとあわてて残りをとおった指であったのである。対して「白光」はどうであろう。

「呐喊」から「彷徨」へ

一篇は次のように結ばれている。

「死因については、むろん問題はなかった。死体から衣服を剥ぎとることはよくあることなのだ。さらに検屍人も生きているうちに水に落ちたものであることを証明した。かれはたしかに水底でもがいているのである。だから十本の指の爪に河底の泥がいつまっていたのである、と」

その泥はしかし、検屍人が言うように陳士成の「生への意志」のものがきあらがいがつけたものではなかった。銀貨を求めて土を掘ったみにくい執着のあとを示す泥であったのである。このような描写とおして、われわれは中国旧社会を支配した「文化」に対する魯迅の嫌悪と蔑視とを見ることができるのである。一種の現在性をもって魯迅にこのような作品の筆を取らせたのは、かれのなかに何か新しいものが動きつつあることを示しているかのごとくであるが、このことについてはのちに改めて触れることにしたいと思う。⁽⁷⁾

(三)

「私の北京は、小さい静かな北京だ」、「こんな静かなところに住んで、こんな静かなひとびとにまじっていると……」とエロシェンコが書いた北京八道湾の周家、そこは一九一九年以来故郷紹興をひきはらった母たちをむかえて、母を守りながら魯迅、周作人、周建人三兄弟の三世帯が同居する閑静な屋敷であった。甥や姪たちが十分に遊べるようにと空地を広くとり、許寿裳から「まったく運動会が開けるくらいだ」と評されたほどの中庭があった。⁽⁸⁾この中庭に起こった小さなできごとに材を取ったのが「兔と猫」、「アヒルの喜劇」(いずれも一九二二年十月)である。この二作品には、

兎・犬・ニワトリ・アヒル・オタマジャクシなどの活潑な姿やこれら小動物たちの動向に一喜一憂する無邪気な子どもたちの声が描かれ、魯迅の作品では稀有な類に属する。しかしちょうどこれらの作品のころより魯迅と周作人の間の不和がすすみ、魯迅が家庭生活の面でも一つの重大な岐路をむかえつつあったことが、いくつかの資料によって明らかにされている。二人の間が決裂し、魯迅が妻の朱氏とともにこの八道灣から磚塔胡同の仮住居に移るのは、翌二三年の八月であったが、『魯迅日記』には早くもこの年十月十九日の項に、

「晩、西单牌楼附近に往き、寓所を覓む」

という記事が見えるのであった。

「五四」期の発言の中心テーマであった「進化論」は、魯迅の青年たちに対する態度がよく示すように、ごく日常的な生活態度をも律する深さでかれに影響を与えていた。弟たちのためにかれがはらった自己犠牲も、単なる家長意識にとづくものばかりではなく、その進化論的な人生観と切り離して考えることはできない。もともと「狂人日記」そのものが、社会関係を家族関係にもどして考える発想を如実に示していたのである。それは単に象徴的な手法が選ばった世界であるとか、中国旧社会の社会倫理が家族倫理を基礎としそれを社会一般へ拡大していた実状の反映であるという説明ですますことのできない、もっと濃密なむすびつきであった。魯迅の「恥辱」や「罪」の意識がかれの犯した愛情のない結婚という個人的体験と深い関係があると思われるように、「こどもを救え……」の語は、甥や姪たちのために「運動会が開ける」ほどの空地を用意しようと金策に奔走するようなかれの生き方と切り離すことができない。したがってともに『新青年』グループの有力な同盟者でもあったこの兄弟の決裂が、魯迅の思想と文学の歴史に対して持つ意味はたいへん大きいといわねばならない。社会と家族との両面から問題は進行しつつあったのである。「兎と猫」、「ア

「呐喊」から「彷徨」へ

ヒルの喜劇」は、この家族の世界が「静か」とばかりはいえなくなったそのような時期の作品であり、表面的に静かで明るい中庭の光景が、この兄弟の葛藤・軋轢の面からの分析をうけいれる余地はやはり何ほどかあるうと思う。⁽¹⁰⁾

しかしこれらの作品のとりあげるものがいづれも小動物の死であること、その死を凝視する作者の姿勢が存在するところが、この二作のもっとも大きな特徴である。「兎と猫」では、三太太（周建人夫人）の買ってきた一对の兎がみんなの注目のなかで巣づくりをはじめ、二匹の仔兎を生み、そのかわいらしい動作によってみなを慰めるが、やがて兎たちの姿が見えなくなってしまう。巣穴の入口に猫の爪痕を見つけて三太太が掘ってみると、くさった草にまじってすこしばかりの兎の毛があるばかり。がっかりしてもう一つ新しくつくられた巣穴を掘ると、そこには眼もあかぬ仔兎が七匹も眠っている。初めの仔兎は黒猫に食われてしまったのである。三太太は黒猫を深く憎んだばかりでなく、親兎の保護のずさんさをとがめて、こんどこそ死なせまいと一所懸命に世話をする。母がこんな面倒な兎の飼い方は聞いたことがないというほどである。こうして兎の家族はますますさかえ、みんなもたいそうよろこんだのであった。しかし、よろこぶ人々をよそに、「私」はどうしてもあの死んでしまった仔兎のことが忘れられない。

「これ以来、私はどうしてもさびしくて（妻原）ならない。夜中ランプの下に坐ったまま、あの二つの小さな生命は、とうとうだれにも知られずいつの間にか失われてしまったのだ、と思う。生物史上に何の痕跡も残さず、S（飼犬―引用者）さえも吠えずに。私はそこで以前のことを思い出した。私が会館に住んでいたころ、朝起きると、大きな槐樹の下に鳩の毛が散らばっていた。明らかに鷹に食われたのである。それが午前中に小使がきて掃除すると、あとかたもなくなくなっている。ここで一つの生命が断たれたことにだれも気づきはしない。また西四牌楼を通りかかったさい、一匹の小犬が馬車に轢かれてヒクヒクしているのを見たことがあるが、帰りには何もなかった。運

び去られたのであろう。通行人はあわただしく行き交うだけで、ここで一つの生命が断たれたことにだれも気づきはない。夏の夜、窓の外でよく蠅がジージー鳴くのを聞くことがある。きつと蠅とりグモに捕まったのだ。しかし私はいままでいっこうに気にかけてこなかった。他人はなおさらその声を聞きつけもしないのだから……」

われわれはすでに「五四」期のかれの小説が一見固く閉ざされた救いのない構図を描きながら、生きがたさにうちひしがれつつそれでも何とか生きたいとあがく民衆の「生への意志」によって浸透されているのを見てきた。孔乙己、単四嫂子、老栓、七斤、閨士、阿Q、どの一人をとってもそうでないものはなかった。数年まえに「生命」を胸に抱きしめて夜明けの路を家に急ぐ老栓（業）の姿を描いた魯迅は、この作品ではかれ自身が暗闇に消えていった仔兎の「生命」をじっと見つめているのである。かれの感覚は窓外で滅んだ蠅の「生命」にさえ反応している。神経はそれほどまでにとぎすまされているのである。このような魯迅の姿は、『呐喊』自序の次の部分を思いださせないだろうか。

「異郷の生活ゆえ来客は少なかつた。古代の碑文のなかでは問題と主義などというものにぶつかることもなかった。だが私の生命はひそかに消えていくのである。これが私の唯一の願望でもあった。夏の夜、蚊を芭蕉扇で追いなから大きな槐樹の下に腰かけて、茂った葉の隙間からのぞいている青い空を見あげていると、夕方から出てくる青虫がよくヒヤリとのど首に落ちてくるのであった」

「狂人日記」以前の紹興県館での魯迅の生活は、ここに描かれたものにはほちかいものであったろう。しかし、一九二二年の「寂寞の時代」を通過せずしてこの時代の生活の回顧がこのような形で表現されえたかどうかは、疑問である。それは単に「問題と主義などというものにぶつかることもなかった」という『新青年』分裂の傷手の大きさを示す語があることによってではない。闇のなかに人知れずほうむり去られた小動物たちの「生命」を凝視することは、自己

「呐喊」から「彷徨」へ

の「生命」を「衰亡」の側から見つめることと紙一重の差でしかないからである。魯迅はようやく自己の「生命」と向き合おうとしているといえよう。何のために自分の「生命」は費消されたのか、かれは自己の「生命」のつかわれ方のある「不条理」さに向き合いつつあったのである。

「もし造物者を責めうるとすれば、私はかれが生命をあまりにみだりに造り、あまりにみだりに毀しすぎると思うのだ」

「造物者はでたらめすぎる。私はかれに反抗しないではおられない。たとえそれが逆にかれの手伝いをするになっても……」

「生命」の不条理への凝視に比するならば、黒猫への復讐心を秘めて青酸カリに目をやる一篇の結末は、やや露骨にすぎて未熟である。それは復讐に向かって奔出していくものを、かれの内部があらためて蓄積、沈澱させつつあることを示しているが、復讐が文学的テーマとして組織され、表現を得るには、もうしばらくの時間が必要であった。⁽¹⁾

この造物者の「でたらめ」が、「生命」の開花を夢見る人間の「夢」を裏切る構図を鮮明に示したのが、「アヒルの喜劇」である。

「さびしい、さびしい、まるで砂漠にいるようにさびしい」というエロシエンコ君が、蛙の鳴き声を聴きたいとオタマジャクシを買ってくるところから、一篇の「喜劇」ははじまる。オタマジャクシが群れをつくって泳いでいる中庭の池をしょっちゅう訪れるこの盲目の詩人に、ある日こどもたちが「エロシエンコ先生、脚が生えたよ」と告げると、かれは「ホウ」といって愉快に笑った。エロシエンコ君は理想家であったから、仲密夫人（周作人夫人）に養鶏を勧め、ヒヨコたちが家中をかけまわるようになった。ある日アヒルのヒヨコが持ちこまれた。仲密夫人はいらないといったが、

エロシエンコ君はかわいくて四羽買ってしまった。アヒルはまことにかわかったが、エロシエンコ君が仕事から帰ってくると、アヒルたちによってオタマジャクシは食べられてしまっていた。「イオシオ先せ、いなくなつたよ、カエルの赤ちゃん」といちばん小さいこどもが言った。仲密夫人も出てきて事情を説明した。エロシエンコ君はただ「オー、オー」と言っただけだった。そのエロシエンコ君は母なる国ロシアに去り、四羽のアヒルだけがいまもこの砂漠でガーガーと鳴いている。

「寂寞」を破るために思ひつたエロシエンコの小さな事業が、同じ動機にもとづく他のこころみによってあえなくついでてしまう皮肉なりゆきを、魯迅は実にあたたく、ユーモラスに描きだしている。しかも「夢」と「生命」とがこの簡潔な短篇の柱となっていることに注意したい。「夢」と「生命」のあつけない結末を手にとって見つめるような一篇のつくり方は、「寂寞」というものを「寂寞」のままに生きぬくそのような自己をつくりあげつつある魯迅の文学的ないとなみを示していよう。むろんこうしたいとなみによって「寂寞」の苦痛や悲哀が軽くなるわけではない。何かを愛することをやめることが不可能である以上、愛することの苦痛や悲哀に耐えうる思想をどのようにつくりうるか、これがこのときかれの課題であつたのではないだろうか。後年魯迅は次のように書いている。

「人が寂寞を感じるとき、創作ができる。空虚を感じたとき、創作はない。すでに愛するものがないからだ。創作はいつも愛にもとづく」(『小雑感』、一九二七年)

「愛」と「寂寞」と「創作」とがこのような定式化を見るまでには、魯迅はなおさまざまな「寂寞」を体験しなければならなかったが、「寂寞」に耐えうる自己をもとめて、美しい追憶のなかにせいいっぱい自己を解き放つたのが「村芝居」(同じく十月の作)であつた。

「呐喊」から「彷徨」へ

作品は冒頭「私」が北京に出てきたあとの二回の芝居見物の不愉快な経験をユーモラスに語る。それは「事實は雄弁にまざる」、「『ロシア歌劇団』のために」がすでに語った北京の姿である。それ以来「私」は中国の伝統劇と縁を断っていたが、ある著書がきっかけで、十一、二歳のころ母の実家のある平橋村で見たすばらしい芝居のことを思いだす。それは春の一夜、村に一隻しかない航船を借りうけて村のこどもたちといっしょに見に出かけた野外の村芝居であった。芝居見物を切りあげて村にもどるときの美しい描写を引用してみよう。

「月はまだ落ちていなかった。あまりながい時間ではなかったようだ。趙莊から離れると、月はいっそう皎々と照った。ふりかえると舞台は灯のなかで、行きに見たときと同じく、ゆらゆらと仙山幽閣のようにすっぱり紅色のもやにつつまれていた。聞こえてくるのは抑揚のある笛の音だった。老旦はもうひっこんだのではないかと思ったが、もう一度見にもどろうとは気まりわくって言えなかった。

しばらくすると、松林はとっくにうしろになっていた。船足ものろくはなかった。ただまわりの闇がいっそう濃くなって、すでに夜も更けたことがわかる。みんな大声で役者の悪口を言ったり、笑ったりしながら、いっそう力を入れて漕いだ。船首にぶつかる水音がますます高くなった。航船はまるでこどもたちを背に乗せた一匹の大きな白魚が浪しぶきをくぐって泳いでいく姿に見えた。夜釣りに出ている年よりの漁師たちも小船を停めて喝采をおくった。日ごろ高い堀にかぎられた中庭の四角な空しか見えない都市のこどもたちの思いもよらぬ広闊な世界が村にはあった。かれらのほとんどが文字を知らなかったが、そこでは『詩経』の暗誦ができることもごくせこましい小さなことに見えた。魯迅は一九一九年に書いた「われわれは今日どのような父親となるか」のなかで、次のように述べていた。

「幸いにしてこの種の教え（名教―引用者）は、多くの人々を損なつたとはいえ、すべての人間の天性をうばいつくしたわけではなかった。『聖賢の書』を読んだことのない人々は、それでもよく名教の斧鉞の下をかくぐってこの天性をたえず流露し、たえず芽生えさせてきたのであった。これが中国人が凋落、萎縮してもなお滅びることのなかつた原因である」

「村芝居」が描いたのは、このような「天性」の生きている「朴素の民」の世界であつた。外祖母が村のこどもたちとの同行を認めたのは、二挺の櫓を持つ大型の船を、一挺に二人、一里ごとに交替と決めて四里以上の水路を漕ぎわたる組織力を持ち、みな水泳が達者で、数人は曹娥江の潮乗りの名手でさえあるこどもたちへの信頼からである。月光の下を背をきらきら光らせながら泳いでいく大きな白魚は、魯迅のもとめた「よく世界の新潮流に遊泳して、沈没することのない」―「われわれは今日どのようにして父親となるか」―人間の根源的な「生命力」の化身であつた。小船を停めて喝采を送る老漁夫たちの姿は、魯迅の脳裏にあつた「進化論」の絵にはかならない。

前年「故郷」で、月光に照らされながら銀の首輪をはめ刺叉を手にして西瓜畑に立つ少年閻土を描いたあと、美しい追想をうち破る冷厳な現実にひきかえし、そこからはじまる自分たちの険しい歩みを確認した魯迅は、ここではむしろ追想のなかへなかなへとはいりこんだあと、「そうだ、今日までずっと、私はあの夜のようなおいしい豆を食べたことがない――あの夜のようなすばらしい芝居も見ることがない」と簡潔にしめくくっている。

この年（一九二二年）のはじめのころ、魯迅はエロシェンコの童話集を編んださいに、次のような序文をのこしている。

「私は、作者が世の人に訴えようとしたのは、すべてを愛しながらその愛するものを得られない悲しみではなかつ

「呐喊」から「彷徨」へ

たかと思う。しかし私が示そうとしたのは、童心の、美しい、しかも真実性のあるかれの夢であった。この夢はあるいは作者の悲しみをおおうベールであったのかも知れぬ。であるとすれば私もあまりに夢を夢みていたのだ。しかし私は作者がこの童心の美しい夢を捨てず、そうして人々に、この夢のなかにはいり真実の虹を見さだめるよう呼びかけてほしいと思う。だからといって私たちが夢遊病者だということにはならないのだ」

「村芝居」もまた魯迅の描いた「夢」であった。そしてそれがいかに「真実」性を持つ夢であったかは、すでに見てきたとおりである。この「夢」が美しければ美しいほど魯迅の「寂寞」は深いということができよう。逆にいえば、魯迅における「寂寞」の深さがこの虹のように美しい風景を描いたのである。「夢」のなかにせいっぱい美しい「真実の虹」をかけることが、このときの魯迅が生きていることの証しであったのである。⁽¹²⁾

(四)

以上諸作品を検討してきたが、忘れてならないことは、魯迅がこれらの作品のほかに『「学衡」をはかる』(二月)にはじまる一連の雑文を發表していることである。これらは、この年南京の東南大学を中心に「国粹の昌明」と「新知の融化」つまり中西の「精華」の融合を唱えて「新文化運動」の批判者、復古主義の新世代として登場してきた「学衡派」と、上海の出版界に活潑な動きを見せはじめた自称「国学家」とに対する手きびしい批判であった。「五四新文化運動」のかちえた成果に魯迅がいかにつよく固執していたか、後年のものであるが、次の文章がよく示している。

「私はどうしても上下四方をたずねもとめて、真黒な、真黒な、真黒な呪文を手に入れ、白話文に反対し白話文を

妨害するすべてのものたちをまず呪ってやらねばならぬ。人間が死んだあとほんとうに魂が存在し、この悪心のために地獄に落ちねばならぬとしても、決して悔い改めたりはしまい。どうしても白話文に反対し白話文を妨害するすべてのものたちをまず呪ってやらねばならぬ。

いわゆる『文学革命』以来、こどもに与えられる図書は、欧・米・日本のものに比べれば、まだ憐れむべき状態とはいえ、ともかく絵もあり説明もある、読んでいきさえすれば理解できるものとなった。しかしちがった考え方をする人々がいて、一所懸命これを妨害し、こどもの世界を、何の楽しみもないものとしようとしている。北京ではいまもよく『馬虎子』(こどもを食べにやってくると思われる伝説上の人物―引用者)ということばでこどもたちを脅かしている。……しかしかれがどんな人物であるにせよ、かれがこどもを食べるのには限りがある。せいぜいかれが生きているあいだのことだ。だが白話文を妨害するものたちの流す害毒は洪水猛獣よりはなはだしく、きわめて広大かつ長久であって、全中国を化して一個の麻胡(馬虎子と同じ引用者)と化し、すべてのこどもたちをことごとく腹中におさめてしまうことができる。

白話文を圧殺せんとするものたちは、一人のこらず滅してしまわなくてはならない! (『二十四孝図』、一九二六年) このような「祈り」「呪咀」の深さは、『朝花夕拾』に収められた「阿長と山海經」、「二十四孝図」、「五猖会」(いずれも一九二六年)などに描かれることになる魯迅の幼いころからの体験にもとづいている。一九二二年、熱気に満ちた啓蒙の時代が過ぎて、この時代の叫びと苦心を無にする復古的潮流が新時代の衣裳をつけて動きはじめたとき、魯迅がふたたび声をあげざるをえなかったのは当然であったといわねばならない。しかも「五四」の余熱はまだつよく体内にあった。激しい呪咀を内に蔵しつつ、それらへの批判をいまは「陣を布く」ことなく「砂漠」のなかに行き来する一人の

「呐喊」から「彷徨」へ

「遊勇」として行かねばならぬところに、魯迅の深い「寂寞」があったのである。⁽¹³⁾ 小説「白光」に中国旧社会を支配した「文化」に対する嫌悪と蔑視とが認められることについてはさきに述べたが、これも復古主義者たちの喧伝する「国粹」の本質を醜惡な讀書人の姿に凝縮しようとしたものであって、その現在性は一連の雜文と同じところにあったと考えられる。

これら一連の文化批判が、「兎と猫」、「アヒルの喜劇」、「村芝居」といったわが国でいう「私小説」風の小説とほぼ平行しつつなされたところに、『呐喊』前期と異なったこの時期の仕事の特徴があった。これも、『新青年』誌上の「随感錄」と『呐喊』前半の小説とが一種の「二正面作戰」⁽¹⁴⁾をとっていたのに比すべき興味深い現象である。そして「兎と猫」、「アヒルの喜劇」の身辺凝視と「村芝居」の追憶とは、やや異った意味からそれぞれ魯迅のなかに次の作品に向かう主体条件をつくりあげつつあった。これらの作品が準備した主体条件と「五四」退潮期の文化現象への批判という二つの流れが合して一つとなったのが小説「不周山」(十一月作。のち改題して「補天」)であったと考えられる。あたかも十月から十一月にかけて魯迅を刺激する一事件が起こった。北京大学の学生たちが講義費(講義用テキスト代)の徴収に反対してストライキをはじめたのである。学生たちの闘争は急速に燃えあがり、学生側の勝利によって急速に終息したが、一人の処分者が出た。処分に反対する学生たちの動きはどうやらきわめて低調であったようである。魯迅はこの事件に関連して一文を書いた。「小に即いて大を見る」という表題どおりに、それはこの一事のなりゆきから「辛亥革命」の始末に説きおよんだものであった。

「いまは講義費はすでに取消しとなり、学生たちは勝利を得た。しかしだれかが今次の犠牲となったもののために祈ったということ聞かない。

小に即いて大を見る。私はそこで長年解けなかったことがわかった。つまり、三貝子花園に良弼（清末の禁衛軍長官）引用者と袁世凱との暗殺をはかって死んだ四烈士の墓があるが、そのなかの三基の墓碑が、民国十一年にもなるのにどうしてまだ字が刻まれないか、が。

犠牲が祭壇のまゝで血を流したあと、みんなにのこされるのはまことに『散^{さん}昨^そ』の一事だけである⁽¹⁵⁾」

さきに述べたように「狂人日記」の成立は、魯迅における「革命」の復活であった。かれが「革命」へふたたびコミットしようと決意したとき、「辛亥革命」が多くの英雄たちの犠牲にもかかわらずなにゆえに「挫折」せざるをえなかったか、この「挫折」の意味と原因を地方都市や農村の現実のなかに探ろうとすることが、多分に意識的なかれの自己配置であったと思われる。「阿Q正伝」にいたる『呐喊』前半の諸作品は、作者のこのような自己配置から生みだされてきたのであった。そのような『呐喊』の作品が「阿Q正伝」以後いちじるしく相貌を変えたことはすでに見たとおりであるが、「五四」期の余熱を、ふたたび訪れた暗黒のなかで孤独に燃やすような諸作品を経て、魯迅はようやく一つの時代が確実に終わったことを確認するようになったのである。そのとき魯迅の脳裏を大きく占めたのが、この「散昨」の二字であったとしても、まことにやむを得ないことであった。力をつかいはたして倒れた創造神女媧に攻めよせた禁衛軍が、身動きひとつしない彼女の死体のもっとも脂肪の厚い部分に陣營を布き、旗を書きかえて「女媧の直系」を称する「不周山」のイメージはおそらくこのようにして生まれたのであらう。

話はさかのぼるが、一九〇六年魯迅が新しい文学運動に熱情を燃やしているころ、ちょうど上海の租界の牢獄から釈放された章炳麟が、日本に渡って同盟会機関誌『民報』の編集を主宰し、目の覚めるような言論活動で留学生たちを刺激していた。この章氏とは魯迅自身直接『説文解字』の講解を受けた師弟関係にあった。その「革命の道德」（一九〇六

「呐喊」から「彷徨」へ

年)という代表的な一文のなかで、章炳麟は次のように述べているのである。

「戊戌(変法)、庚子(自立軍)の事は革命に比べると数倍も容易であるが、それでも道德の腐敗のため長つづきしなかった。ましてそれより困難な革命、革の灰を積んで洪水をせきとめ、大亀の足を切りそれで東西南北の四極を立てなおす大事業は、広量剛毅で重い荷を担う人物でなければ関与できないのである」(近藤邦康訳)⁽¹⁶⁾

章炳麟は新しい「革命」は旧来の改革運動と全く異なった「女媧補天」にも比すべき事業であり、それを担う革命家は「富貴利禄」の觀念に深く毒された伝統的士人と全く異なった道德を身につけた自己犠牲的で敢為の人格であらねばならないと説いたのである。魯迅は後年「不周山」の本意について、「最初の意図は性の発動と創造からその衰亡までを書くことにあった」(「私はどのようにして小説を書くようになったか」、一九三一年)と述べているが、女媧を中心とする創造神話と洪水神話を、「辛亥革命」と「五四」を経て魯迅に認識されるようになった「中華民国」の「発動」、「創造」、「衰亡」の歴史に重ねて「一にして二、二にして一」なる世界を表現しようとしたのが、この「不周山」ではなかったかと思う。この作品が、人類の創造と文学の成立の歴史という壮大な視野で構想されていることは、「辛亥革命」の帰趨が露呈した問題を、魯迅が根底的にすくなくとも中国における「人」そのものの、「文学」そのものの問題として考え直さざるを得ない、そういう場所に立っていることを示しているだろう。⁽¹⁸⁾魯迅はもう一度ふりだしにもどっているのである。こんどは「狂人日記」とも異なった立場と視点から、中国人の歴史と文化の総体に対する新しいイメージをつくりあげ、表現することが必要だったのである。

女媧は夢のなから不意に目を覚ました。どんな夢であったか、すでに朦朧としていたが、何かが足りないような、何かが余計であるような、悩ましい気持であった。見たつと自然はすでに形を成し、息づいていた。何ともつまらな

い気がして、彼女は立ちあがり、豊満な肉体を海辺にはこんだ。何気なくすくいあげた泥を数回こねると、彼女とそっくりの小動物ができた。それが人間であった。いままで味わったことのないよろこびを感じながら、女媧は人間づくりで没頭した。かれらはかわいい声をあげて彼女をよるこぼせたが、やがてしだいに口数が多くなり、理解できない声を発するようになった。女媧は疲れてきたが、仕事はやめなかった。しゃがんでいるのが苦痛になった女媧が、山によりかかって何気なく一本の藤蔓を引き抜きまわすと、はねた泥水の一滴滴が人間となってまわりにあふれた。一ふり、二ふり女媧は人間をつくりつづけたが、大半はうすばんやりした、いやらしい人間たちであった。疲れきった女媧は山によりかかってしゃがみこみ、目を閉じた。

ドカーンと音がして、女媧はふたたび目を覚ました。山は崩れ、洪水が滝のようにはしった。波が静まったあと、女媧は水面にのこっている山や、水が退いて露出した岩のかげに、彼女の理解できぬことばを話すすっかり様が変わりし人間たちを見いだした。さっきの大変動は康回と顓頊が争い、敗れた康回が怒って不周山に頭をぶつけたために起こったものであった。天は傾き大きな亀裂がはいっていた。女媧は葦を抜いて高く積み上げ、青い石が足りなかったので他の雑色の石まで集めて天の裂けめを埋めていった。ときには人間たちに冷笑されたり罵られたり、手指を咬まれたりしながら石を集めた。女媧が葦に火を点ずると、やがて火柱が天にまでとどき、石を溶かしはじめた。女媧の身体から汗が滝のように流れた。火が鎮まって天が青一色になった。女媧が手を伸ばしてなでみると、まだかなりデコボコがあった。「元気をとりもどしたら、またやろう」とりあえずこんどは地上の大水を葦の灰を積んで治めていった。女媧は灰だらけになってはたらいだ。やがて最後の力をつかいはたした女媧は、地上に横たわって息絶えた。

火と煙がおさまったとき、顓頊の禁衛軍が倒れている女媧に攻めよせてきた。女媧が息絶えているのを見さだめる

「呐喊」から「彷徨」へ

と、かれらは死体の腹部に陣營をつくった。そこがいちばん脂肪が厚いことを知っていたからである。そのあとかれらは旗幟を書きかえ、自分たちだけが女媧の嫡孫であると称した。

こうして「不周山」は、女媧の溢出するエネルギーがつくりだした人間たちが、彼女の無垢な愛と労働と自己犠牲を裏切る小ざかしく卑陋な世界をつくりあげてしまう物語となったのである。最初につくられた人間たち、それはすでに意識の下に沈んでしまった「夢」にみちびかれて、女媧が無意識のうちにをつくりあげたものであったろう。かれらが最初に発した言語「Nga i nga」は空腹を訴えて乳をもとめる泣き声であって、人間の「欲求」の表現であろう。それゆえその声を聞いた女媧は、全身の毛孔から乳白色のものを地上に発散したのである。つづいて人間の口から出た「Akon, Agon i」は「充足」の意志表示であろうか。それゆえ女媧は「ああ、何てかわいらしいんでしょう」と、泥のついた手指で人間のふっくらした顔をつついたのである。「Uvu, Ahaha i」こうして「歓喜」の表現としての笑いが発生する。それが女媧にとってもはじめての笑いを誘いだす。そこには天真でいきいきとした心の通い合いがあった。魯迅はこのような人間の自己表現と交流とに「文学」の発生を見ていたといえる。

ところがもう一度女媧が目覚めたときに見たのは、様相の一変した人間の世界であった。天地の崩壊そのものが顚頤と康回との戦争がひき起こしたものであったが、鎧に身を固めたかれらの言語は、彼女を真赤になるほど怒らせてしまう。

「嗚呼、天ハ喪ヲ降セリ。顚頤道ナラズ。我后ニ抗ス。我后躬ヲ天討ヲ行イ、郊ニ戦ウ、天徳祐ケズ、我師反走ス……」

「人心古ナラズ、康回実ニ豕心アリ、天位ヲ顚ウ、我后躬ヲ天討ヲ行イ、郊ニ戦ウ、天実ニ徳ヲ祐ク、我師攻戦シ

テ敵ナク、康回ヲ不周之山ニ殛ス」

魯迅がここで『書経』を摸した文体を用いているところに、かれの用意がある。『書経』は、堯・舜以下、夏・殷・周三王朝の諸王のことばを、王直屬の記録官が記録した「王言」の集成であり、その文章は、中国の記載言語のなかで、考古資料を別として、散文ではもっとも古いものとされている。⁽¹⁹⁾魯迅はここに中国における「文学」の成立を見てゐるのである。中国における「文学」はこのまま、権力の交替（一治一乱）に呼応しつつ「奴才の言語」を書きつづつて、発生期の天真を回復して自立することはついになかった、というのが魯迅の認識である。魯迅にとって復古主義者のいう「国粹」とはこのようなものであったのである。一方、腰にぼろ布をまとっただけの裸身で登場する民衆は、不幸にも、戦乱のなかを没主体的に右往左往しつつ「天性」を磨滅して自らの「文学」をつくる力を欠く、感覚の麻痺した存在でしかない。また、神仙家たちの伝える東海の「神仙山」には、その後何人かの皇帝が方士を派遣したがそこにたどりついたものはいなかった。そしてその伝説はついに一篇の「ユートピア」文学も生むことはなかったのである。

「上下四方すべて死滅以上の静寂であった」

その「静寂」のなかに、灰だらけになって息絶えた女媧が横たわる。その肌の輝きで天空も色を失うほどの溢れるような生命力をもった女神の、その「生命」の費消の不条理を見つめている魯迅の姿がそこにある。この「寂寞」の一年を経て、かれのたどりついた凄凉たる世界であった。⁽²⁰⁾

(五)

一九二二年十二月、魯迅は「狂人日記」から「不周山」まで、五年かけて書いた作品十五篇を集めて一冊とし、『吶

「呐喊」から「彷徨」へ

喊」と名づけ、「自序」を書いた。この文章は、司馬遷の「太史公自序」などの伝統に立つ自伝的要素のつよい一文であるが、次のような文章ではじめられている。

「私も若いころにはたくさん夢を見たことがある。その後大半は忘れてしまったが、自分でも惜しいとは思っていない。回憶というものは、人をよるこぼすこともあるが、ときには人を寂寞におちいらせてしまうものだ。精神の糸を過ぎ去った寂寞の時間につなぎとめていて何になるう。だがあいにく私はすべてを忘れ去ることはできない。それが自分でも苦しいのだが。このすっかり忘れ去ることのできないものが、いまになって『呐喊』の由来となった」

『呐喊』の成立に言及したわが国の文章でこの冒頭の文章は比較的に軽視されているが、魯迅はここではっきりと、おおかた忘れてしまった「夢」のなかでどうしても忘れ去ることのできないものが『呐喊』の諸作品になったと、その由来を述べているのである。⁽²⁾「自序」はこうして、自分の閱歴と思想の変化を、「夢」とその「夢」の挫折を軸に語り始める。父の病氣と死、N市K学堂への入学、日本留学と医学志望。医学志望について、魯迅は次のように述べる。

「私の夢は美しく豊かだった。卒業して帰ったら、私の父親のように誤られた病人の病苦を救い、戦争のときは従軍して軍医となり、あわせて国の人々の維新に対する信仰を促そうと思った」

△幻燈事件△を契機とする文学への転換、雑誌『新生』（新しい生命）の計画とその挫折。

「あとではこの三人もそれぞれの運命に駆られて、いっしょに自由に将来の美しい夢（好夢）を語ることができなくなった。これがわれわれのついに誕生しなかった『新生』の結末であった」

いい知れぬ「寂寞」がはじまり、その苦痛をとり除くための麻醉（国民への沈潜）と「古代への回帰」、古代の碑文の抄写のなかに人知れず消えていく「生命」——とたどってくると、「自序」をつらぬく柱に「夢」と「生命」と「寂寞」

とが存在することがわかる。私はさきに「薬」について触れたさい、一つの類推から、「魯迅が流産した『新しい生命』を不毛な人血饅頭に託してひそかに埋葬したとき、かれのいう『寂寞』も同時に埋められたにちがいない。『寂寞』はだれよりも魯迅自身が、『人間』の兆候に照らされつつ、自分の努力で破るべく決意したものであって、……もしこれをしも『美しい夢』（『好夢』）というのなら、『美しい夢』は当時の魯迅自身のものであった」と述べたが、『呐喊』の前半を一貫するのは、たしかに魯迅の忘れえぬ「夢」であったといえる。そしてさきに引いた「自序」冒頭の文章や、「自分でも苦痛に思っている『寂寞』を、さらに私の若いころ同様いま美しい夢を見ている青年たちに染したくない」という願慮が示すように、くだかれた「夢」とくだかれても忘れえない主体とがつくりだすひき裂かれた悲哀の感情が「寂寞」である。この両者と、濃密な「生命」の意識とが重なり合う「自序」の構造は、いままでに縷々述べてきた『呐喊』後期の諸作品のしんがりに位置するその作品性、を実ははっきりと示している。この「自序」における「詩と真実」の關係はきわめて微妙であるが、その問題性をもっともきわどく露呈しているのが、「麻醉」状態の自己をふたたび解き放すきっかけとなった事件を語る有名な部分である。

『「きみはこんなものを写して何の役に立つのかね」』

ある夜、かれ（金心異すなわち錢玄同のこと―引用者）が私の古碑の写本をめくりながら、さぐるような質問をした。

『役に立ちはしないさ』

『それじゃどういうつもりで写しているのだ』

『別にもりなどないさ』

『ぼくの考えでは、きみはすこし文章を書いたらいいと思うんだが……』

「呐喊」から「彷徨」へ

私はかれの気持がわかった。かれらは『新青年』をやっていたが、当時どうやらだれも賛成するものがないばかりか、反対するものもなく、かれらもまた寂寞を感じていたのかも知れないと思った。しかし私は言った。

『鉄の部屋があったとする。窓がなくて毀すのはとても困難だ。なかには多勢の人が熟睡していて、まもなく窒息して死ぬだろう。しかし眠ったまま死ぬのだから、別に死の悲しみは感じないわけだ。いまきみが大声を出して、比較的醒めた数人を起こせば、この不幸な少数者はとりかえしのつかない臨終の苦痛を味わうことになる。きみはそれでもかれらに対して申訳が立つと思うかね』

『しかし何人かが起きあがったら、この鉄の部屋を毀す希望が絶対ないとは言えないじゃないか』

そうだ、私には私の確信があるけれども、希望ということになると抹殺することができない。なぜなら希望は将来にあるものだし、私の絶対ないという証明で、かれらのありうろというのを説き伏せることはできない。そこでとうとう私も文章を書くことを承知した。これが最初的一篇『狂人日記』である」

金心異の勧誘に対する魯迅の対応が、当時このとおりではなかったであろうことを、私は一九一九年執筆の『『或る青年の夢』訳者序』によってすでに述べた。孫伏園に「何か書かないか」とすすめられたとき、「或る青年の夢」の翻訳ならやれるが、いまは時期がわるいと答えた魯迅が、その夜本の背文字を眺めるうちに深い「羞恥」に襲われ、翻訳に踏みきっていく動きの方が、「狂人日記」の展開や「小さなできごと」などと比較しても当時の実情にちかいと考えられるからである。しかも同じ文章で「かれらがはげしい風雨のなかで、たいまつを掲げているのに、私は黒い幔幕でそれを遮蔽し、眠っている人々の面前で媚を売ろうとするのか」と自己を問責する態度は、鉄の部屋に眠る人々を起こすことをためらう「自序」の叙述と明らかに異なる。

実はこの「鉄の部屋」のイメージは、魯迅にとってここではじめて現われたものではない。われわれは早く一九〇三年に書かれた『月界旅行』弁言』のなかに次のような文章を見ることが出来る。

「黒い牢獄に沈淪し、耳と目をふさいだまま、たがいに欺きあい、毎日その至徳を称えることは、もとより造物者のよろこぶところではあろうが、人類の羞すべきことである。しかし人類は希望・進歩を有する生物である。それゆえ一部のものがすこしでも光明を得るならば、さらに飽くことなく大いなる希望を發し、引力を斥けて、空氣にうち勝つことを思い、その思いはかるがろと飛行して、妨げられることはないのである」

この少作の短い文章が、すでに魯迅におけるいくつかの基本概念、すなわち「羞恥」、「想像力」、「希望」、「進化」を含んでいることは、まことにみごとというほかないのであるが、魯迅のこの文章は何の屈折もなく樂觀的である。「黒い牢獄」に眠り、沈淪することはひたすら恥すべきことと考えられているのである。この「牢獄」のイメージと「羞恥」との結合は、微妙にその内実を変えながら、「摩羅詩力説」（一九〇七年）、「或る青年の夢」訳者序（一九一九年）にも明瞭に認められる。錢玄同との實際の對話がどのようなものであったか、一九二一年七月に發表された「無題」と題する一文（すでにとりあげた二年作の「無題」とは別の文章である）は、黙って血を吸う蚤の方がブンブン声をたてながら刺す蚊よりよほどまだ、ほほ同様の理由で、私は「國民を喚び醒ます」のもあまり好きではない、この道理については、かつて槐樹の下で金心異に語ったことがある、と述べていることから見ても決して単純ではない。しかし、すでにいくども触れてきた反発―連帶、否定―肯定の論理で、たとえば「髪の話」のごとく結局は連帶、肯定の側にひきよせられていく構造をもって、それは『或る青年の夢』訳者序』のような形をしていたと考えられる。そのような構造が一九二一年も後半になってしだいに崩れはじめ、「無題」のような憤激の言となったのであろう。このような動搖を経

「呐喊」から「彷徨」へ

て、魯迅がふたたび新しい連帯と肯定（つまり新しい論理）を見いだそうとしたところに、「自序」の「希望」をめぐる論理がつくりあげられる必然性と必要性とがあったのである。⁽²⁵⁾「私には私の確信があるけれども、希望ということになると抹殺することはできない。なぜなら希望は将来にあるものだし、私のないという証明で、かれらのありうるというのを説き伏せることはできない」という語は、後年の『「自選集」自序』（一九三二年）の「私は自分の失望に疑いを持った。なぜなら、私の見た人々、事件にはたいへん限りがあるからだ。この考えが私に筆を執る力を与えてくれたのだ」という叙述につながる。そこにわれわれは未定、未知のものに賭ける新しい発想を見いだすことができる。思うに「希望」は単に未来に属するという事で抹殺できないのではなかった。それは何よりもかれの過去の忘れようとしても忘れることのできない「夢」であった。しかし一九二二年十二月という時点で、上記のような発想に立つしか自分の未来を考えることのできない魯迅の「絶望」の深さがあったのである。しかも同時にそこにこの「不可知」の論理の戦闘的意義もあったのであって、このことは一九二五年執筆の「ふと思いついて四」の一文が、たいへん明快に語っている。

「辛いなことに、『国民性は絶対変えることができない』と自信をもって断言できる人はいないのだ。この『不可知』のなかには、かつてなかった……滅亡の恐怖もあり得るが、同時にかつてなかった再生の希望もあり得るのだ。これが改革者の一点の慰めとし得るところかも知れない」

『「呐喊」自序』は、魯迅が「羞恥」にかえて、このような「不可知」の論理をわがものとしたところに大きな意義があった。そしてそのために一九二二年の「寂寞」の凝視とその表現のはたした役割もあったのである。ただ忘れてならないことは、この「不可知」の論理においても「国民性を変えねばならない」という初志がビクともせずにつらぬいていることである。重大な違いはそれを魯迅がいままでのように「人類」の概念や「進化論」によって説くことができる

くなったことである。「羞恥」の契機が失われるとき、それにとってかわったのが、「責任」の意識だけで動揺をくりかえす「彷徨」そのものであった。「いまきみが大声を出して、比較的醒めた数人を起こせば、この不幸な少数者はどにかえしのつかない臨終の苦痛を味わうことになる。きみはそれでもかれらに対して、申訳が立つ、『対得起』と思うかね」という発言が、この転換をよく示している。「彷徨」の第一作となった「祝福」（一九二四年）の「私」は、「人間が死んだあと魂はあるのでしょうか」、「地獄はあるのでしょうか」、「死んだ家族は顔を会わせるのでしょうか」と問う崔林嫂の視線のまえに、どう答えたらいいかと逡巡をくりかえしつつ、いい加減な答えをして遁走するしかなかったのであるが、魯迅自身は、「あなたは学問をしたお方だ。それによそに出て、たくさんのかことを知っている」という前置きで問いを発する彼女の視線の光に耐えながら、自らの「彷徨」を「彷徨」のままに表現していく新しい文学の世界に身をおくことになったのである。

注

- (1) 拙稿『『恥辱』的存在の形象について——民族的自己批評としての魯迅文学 その二——』（『北海道大学文学部紀要』二十六の二、一九七八年）。
- (2) 『域外小説集』（新版）序（周作人記と署名するも魯迅の執筆。一九二〇年）。
- (3) 拙稿「出版における『恥辱』『羞恥』の契機について——民族的自己批評としての魯迅文学——」（『北海道大学文学部紀要』二十五の二、一九七七年）。
- (4) 一九一九年四月十六日付傅斯年宛書信にも次のように言

北大文学部紀要

う。

「私自身ほんとうの作家でないことを知っています。いま声をあげているのは、それによって何人かの新しい作家を呼び起こし……中国の寂寞を破りたいと思うからです」。

- (5) 高杉一郎編『日本追放記』（ワシリイ・エロシエンコ作品集二、みすず書房、一九七四年刊）。ただし「時のおじさん」（中国訳「時光老人」）はこの年十一月の作と思われる、エロシエンコがふたたび北京にもどってきてからの作品。魯迅訳は十二月一日の『晨报四周年紀念増刊』に掲載。もともと日本語で書かれたものと考えられ（高杉一郎氏）、一九二三

「呐喊」から「彷徨」へ

年一月号の「我等」に発表された。

- (6) 陸耀東『「為^レ俄国歌劇団^ク」与該団在北京的演出』（『鲁迅研究百題』、湖南人民出版社、一九八一年刊）参照。

- (7) 「孔乙己」と「白光」を比較・検討した專論に、李希凡「犧牲品与殉葬品——關於孔乙己和陳士成」（『呐喊』「彷徨」的思想与藝術、上海文芸出版社、一九八一年刊）がある。

- (8) 許寿裳『亡友鲁迅印象記』一七「西三条胡同住屋」（人民文学出版社、一九五三年刊）。

- (9) 「鲁迅日記」の一九二二年一年分は散佚したため、許寿裳手抄の断片などをもとにした文操「一九二二年『鲁迅日記』拾輯」（『中国現代文芸資料叢刊』第一輯、上海文芸出版社、一九六二年刊）による。

- (10) この二作品を、三宝政美『「兎と猫」・「あひるの喜劇」を書いた鲁迅』（『富山大学人文学部紀要』創刊号、一九七八年）は、「不惑に近い鲁迅が、ようやく八道湾に構えた周家の崩壊を不安と恐怖のうちに予感しつつも、その破局をあくまで阻止しようとしたところに」生れたとする。

- (11) 一九二六年作の「犬・猫・鼠」（『朝花夕拾』）があらためて鲁迅と猫との宿仇をとりあげ、文中で次のように述べる。

「私が愛するものを失って、心に空虚が生じたとき、私はそこを復讐の悪念で填めねばならない」

- (12) 『呐喊』（「不周山」）をのぞく後半の四作品については、

丸山昇『「呐喊」の時期における鲁迅』下（『鲁迅研究』十九号、一九五七年）を、特に末尾の三篇については木山英雄『「呐喊」末尾の三篇について』（同二十号、一九五八年）を参考にした。また「村芝居」については拙稿「紹興の船——鲁迅紀行——」（『野草』二七号、一九八一年）を参照。

- (13) 『自選集』自序（一九三二年）。

- (14) 丸山昇『鲁迅——その文学と革命——』（平凡社、一九六五年刊）。

- (15) 処分された学生は馮省三といい、鲁迅はその後なにくれとなく援助を与えている。馮の「犠牲」については、『两地書』三十二信（一九二五年五月十八日）でも言及。「散昨」は犠牲に供えた「昨」（ひもろぎ）をみなで分けて食べること。

- (16) 西順蔵編『原典中国思想史』第三冊（岩波書店、一九七七年刊）所収。

- (17) 茅盾「玄武門之變序事」に「故事新編」で、鲁迅先生はかれ特有の鋭い觀察、戰闘的情熱と創造的技術によって、古人をいつそう死なせなかっただけでなく、古代と現代を錯綜・融合して一にして二、二にして一なる世界をつくりあげた」と述べる（李希凡「熔古鑄今的藝術形態与風格——釈『故事新編』」、「求是月刊」一九八一年第一期所収より転引）。

- (18) 「辛亥革命」についての鲁迅の概括的考えは『两地書』八信（一九二五年三月三十一日）に見える。

「民国元年のことをいうと、たしかにずっと光明がありました。当時私も、南京の教育部にいて、中国の将来には希望があると思いました。むろん当時も劣悪な分子はいました。しかしかれらはともかく失敗しました。二次革命が失敗するとしだいに悪くなり、悪化の一途をたどって今日のようなになったのです。しかし実はこれも新しく加わった悪ではありません。塗つてあつたものが剝けおちて姿が現われただけです。奴才に家政をゆだねてどうしてよくなりましょう。最初の革命は排満であつたので、容易にできました。その次の改革は国民が自分たちの悪い根性を改革しなければならなくなり、そこでしりごみしてしまいました。だからこれからのものとても重要なことは国民性の改革です。そうしなかつたら専制であろうと共和であろうと、看板は変えても品物はもとのままです」。

(19) 清水茂『書経・春秋』(『中国詩文選』三、筑摩書房、一九七五年刊)参照。なお「人心古ナラズ」は当時の復古主義者の決まり文句。たとえば、「世道澆漓、人心古ナラズ、国粹将ニ亡ビントス、コレ吾レ天ヲ仰ギ、扼腕切齒シテ三タビ嘆息スル所ノモノナリ」というぐあい(魯迅「人心ハナハダ古ナリ」、一九一九年)。

(20) 「不周山」については、武田泰淳「魯迅とロマンティズム」(『武田泰淳全集』十二巻、筑摩書房)と伊藤虎丸「『故

事新編』の哲学——序説及び「補天」論——」(『東洋文化研究所紀要』六八号、一九七六年)を参照。三宝政美「『補天』解釈の余地」(『野草』三五号、一九八〇年)は、注(10)の同氏の論文のあとを受けて、この作品の「私小説」的な読み方を示し、参考になる。

(21) この点については飯倉照平「魯迅」(『人類の知的遺産』六九、講談社、一九八〇年刊)が、魯迅の口語詩「夢」(『新青年』四巻五号、一九一八年五月)を引いて、簡潔かつ明快に述べている。「夢」は次のような詩であり、「自序」冒頭の叙述に対応して、「狂人日記」当時の魯迅の心象をよく説明している。

多くの夢が暮れ方になるとさわざはじめる。

まへの夢がそのまへの夢をおしのけたばかりなのに
あとの夢が来てまへの夢を追いはらう。

去った夢は黒くて墨のよう、のこった夢も墨のように黒い。
去った夢ものこった夢も呼んでいるらしい。

「私のすてきな色をごらん」と。

色はすてきかも知れぬ。だが暗くてわからない。

そのうえわからないのだ。だれが話しているのか。

暗くてわからない。熱が出る。頭が痛む。

はつきりした夢よ。はやく来い。

「呐喊」から「彷徨」へ

(22) 注(1)に同じ。

(23) 『呐喊』自序の虚構性を早く指摘したのが、竹内好『鲁迅』(日本評論社、一九四四年)である。竹内氏は次のように述べている(引用は一九六一年の未来社版による)。

「いったい鲁迅は文章で自己を談る場合、追憶の形をとることが多い……が、『想い出といふものは、人を楽しませるものであるが、時には人を寂しがらせるものである』という書き出しの『呐喊』自序は、ことにその感が深く、それだけ虚構の多いものと私は見ている。金心異が訪れたので『狂人日記』が生れたということになっているが、恐らくそのまます実ではあるまい。……五年後に彼がそれをそのように追憶した、という現在の気持に対しては、五年前の事実がどうであったかということは、どちらでもいいのである。事実は追憶に利用されているに過ぎない。しかし、追憶そのものは真実である。追憶しなければならなかった彼の気持には、偽りはない」

(24) 鲁迅における「牢獄」と「希望」のイメージについては、大谷通順『鲁迅『月界旅行』『地底旅行』について』(ちかく

発表の予定) 参照。

(25) 『呐喊』自序における「希望」の論理についてはより俯瞰的に鲁迅における「希望」の論理について述べている藤井省三『八故郷の風景——鲁迅「希望」の論理の展開をめぐる——』(『中哲文学会報』七号、一九八二年六月)が参考になる。

追記 本稿は「出発における『耻辱』(『羞恥』)の契機について」、『耻辱』的存在の形象について」の続篇であり、連作

「民族的自己批評としての鲁迅文学」の第三部にあたる。本来三部作を構想したのであるが、『呐喊』自序の問題性が大きいために、今回のような叙述となった。連作としてのバランスに欠けるものとなり遺憾であるが、全体の構想を五部作に改めることにしたい。第四部、第五部の仮題は、『彷徨』における『耻辱』の推移について、『耻辱』の回復についてである。前稿に寄せられたご批判に感謝するとともに、本稿も一つの問題提起としてご検討いただければ幸いである。